
曲がりなりにも神である

海南

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

曲がりなりにも神である

【Nコード】

N7202X

【作者名】

海南

【あらすじ】

人を死に誘う神と、良く分からない神の話。

出会い

物心ついた頃から、忌み嫌われる存在であった。どうやら俺は、死を呼び込む体質だったらしい。

まだ言葉も覚えていない赤子。抱き上げてくれた人は皆、その日のうちに仏にしまふ。最初は偶然が重なっただけだろうと気に止める人も居なかったが、それが六つも重なると流石に気味悪がった。少し年を取れば、人を選んで這っていった。選ばれた人は当然の如く、その日のうちに亡くなった。そして終に、人々は幼い俺を避けるようになった。

最初のうちは未だ、家族がいるだけ良かった。外を歩くと人が退き、出て行けなどの野次が飛ぶ中でも、離れずに支えてくれた存在があった。最後まで貴方の味方よと、母は何の躊躇いも無く俺の手を握ってくれた。それだけが、救いだった。

死を呼ぶ者

いつしか俺はそう呼ばれるようになった。目を合わせるな、着物に触れるななど、擦れ違っただけで嫌われる。それでも俺は、何かに惹かれる様に人の間に入っていた。見えるのだ。光が。轟々と燃え盛る炎が。だが、ある人には見えない。そして、然ういった人は必ず、生きている者ではない目をしていた。俺は光を持たない人を追って、町の中を彷徨っていた。

もう、子供とも大人とも言えない年になった。どんなに時が経つても、俺の家族は皆、厄介者扱いをされ続けてきた。死を呼ぶ俺は外に出ることを許されず、一人家に軟禁され、書物を読み漁っている日を過ごす事が多かった。何の面白みの無い毎日でも、一人の妹と父母は、俺を退屈させないようにと必死だった。人を殺してしまいう手前、外に出させる訳にはいかないのだ。そんな家族の思いを知っていても尚、時折、体内を巡る隆々とした血液は、外に出ることを促すのだった。

そんな日々を何日と過ごしてきた。自分を求める声のようなものも聞いた。それが幻聴だったとしたら、それだけ精神を弱らせていたということだろう。外に出してくれと懇願する俺に、家族は苦しそくに挨拶するだけだった。そんな事を繰り返しているうちに、ある異変に気付いてしまった。妹の、炎が弱まってきているのだ。其れとはなしに体調を聞いてみても、何てことありませんよと笑って返してきたが、此の儘では妹は死んでしまふと俺はもう分かった。分かっていながら、それを止める手段など無かった。到頭、妹の炎は消えてしまった。

初めのうち、妹はまだ生きていた。しかし、目には命は宿っていなかった。口数も減り、表情も無くなった。体調を問う母の言葉にも、何てことありませんよと、言葉こそ昔のままであるが昔より随分と勢いのない口調で返事することが多かった。母も、様子が普通でないのを気付いていた。時折探るように、俺の表情を盗み見ていた。

俺の血は妹を見て、どうしても動かねばならないと急き立てた。何がそうさせるのかは分からないが、それが妹にしてやれる最後の事だと、妹が望む事だと、心を動かすものがいた。そして、終に俺の心は得体の知れない何かに負けた。俺は父母の居る目の前で、妹の細い肩に手を置いてしまった。刹那、妹は初めて、感情のある目で俺を見た。そのあまりにも短い出来事が、俺のこれからを大きく変えた。

次の瞬間、母の手が勢い良く俺の手を叩いた。子を子として見ない眼で俺を睨み、今何をしたの、何をしたのと喚くばかりだった。父は妹を俺から庇う様に、きつく胸に抱いていた。その時から、もう、俺の家族は居なくなっていた。そこに居るのは、か弱い娘と、その父母、それと一人の死を呼ぶ者だった。今までの感情を放つ様に、俺は家を飛び出した。妹はきつと死ぬのだろう。それは俺の所為なのだ。自分を睨む父母の顔が頭から離れなかった。最後まで、母は手を握ってはくれなかった。

随分と成長した俺の姿を見て、誰も何も気付いていなかった。家族であった者たちも、誰一人後を追って来なかった。久しぶりに出た外は、記憶よりもずっと冷たかった。陽の光は眩しすぎるぐらいなのに、凍えるほどに寒かった。町に行く人は皆、生きている人ばかりだった。粲粲たる炎の中を、俺は何かに導かれるように走っていった。

目の前には大きな桜の木が成っている。樹齢何千年と経っているだろう。走り疲れた俺は、直ぐ傍にしゃがみ込んだ。こんなにも大きな存在であるにも拘らず、まるで威圧を感じなかった。太い幹に背を預け、暫く目を瞑った。思い出すのは自分を睨む四つの目だけだった。そして、妹の最後のだ。の挨拶は一体何だったのだろうかと思いを巡らせた。何を考えても分からなかった。

其処で何をしていると、人の声が聞こえた。ゆっくりと目を開けると、確かにそこに人はいた。沈む夕日の光を背に浴びて、その表情ははつきりとは見えなかった。そして俺は、そいつに光が無いという事に気付いた。慌てて俺に近づくかと声を上げると、何故とそいつは返す。俺に近づくものは皆死ぬのだと応えると、今度は大声で笑って言った。お前は人を殺すのか。そして私を殺すのか。残念ながら、お前に人は殺せない。そして私も殺せない、と。

そんなことは無いと言い返すと、そいつは俺の目を見て言った。死神よ、自分の能力を履き違えるな。お前の手で人が死ぬのは、何もお前が殺した訳ではない。お前が人を選んで殺しているのではなく、人がお前を死に所として選んでいるのだ。

死神。死を呼ぶ者としてはこれほどお似合いな呼び名はないだろう。自嘲気味に笑う。死神であれなんであれ、やっていることは同じだろう。とどのつまり、俺は人を死に導いているのだ。そう言うとお前は何も分かってないなとそいつは言った。死神というものは、魂を導くものだ。命数尽きた儼から魂を引き離す力を持った者

を言うのだ。お前が今まで殺したと思っっている相手は皆、お前が魂を抜く前から既に死んでいるのだ。その言葉を聴いて、俺はやっと自分が人ではない何かであると気付いた。目の前の奴は、何も比喻として死神と言っているのではないのだ。俺は人ではなかったのだ。正真正銘の死神だったのだと。

そんなはずは無い。と、思うより先に言葉が出た。俺は死神ではない。人の子だ。人から生まれた人の子だ、と。冷静な自分は驚くほど死神である自分を受け入れているが、心は人で在りたがった。その言葉を聴いたそいつは驚いたように目を丸くした。そうか、お前は自分が死神だと知らなかったのか。と独り言のように呟いた。

お前は人の命を見たことがあるだろう。炎のように見える光のことだ。生きている内は荒々しく燃え盛っているが、命数尽きると消えてしまう。お前は、それが見えるだろう。その言葉に俺は、お前の命は何一つ見えないと応えた。私には無いのだとそいつは応えろと、だが、人のは見えただろうとまた聞いてきた。お前は人ではないのかと聞くと、そいつは澄まして人ではないと応えた。私は人ではないからその炎を見ることが出来る。また、お前も人ではないから見る事が出来る。人にはその炎は、決して見る事の出来ない物なのだ。じゃあお前は何者なのだと問うと、お前と似たような者だ、と応えた。

そいつは少しずつ俺との距離を縮めてきた。近づくにつれ、そいつは思ったよりも小柄で、精悍な面付きだと言う事に気付いた。男にしては綺麗過ぎて、女にしては遅しかった。そいつは俺の直ぐ傍に来ると、上から見下ろして言った。死神、お前に行くところはあのか。無い。と短く答えると、そいつは笑顔を作って続けた。ならば私と一緒に来ないか。長年一人で過ごしてきて、もう孤独は退屈だ。お前もどうせ行くところが無いのだから、私と暮らすのもいいだろう。そいつは右手を差し出してきて、俺が掴むのを待っていた。

こいつについて言っても大丈夫なのか。しかし、初めて自分を理

解してくれた相手だった。これから孤独を生きることになるだろう俺には、誰でもいいから隣に居てほしい気持ちはあった。

目の前の手を見つめて一つ問うた。何故俺なのだ。世界には他にも孤独を生きる神など巨万といるだろう。するとそいつは暫く考えて、それは目の前にお前が居るからだろう。それに、死神と暮らすのは楽しそうだ。とあけらかんと言った。

呆氣に取られて上を見上げると、そいつはやはり笑っていた。こいつは奇妙な奴に捕まったと胸の内で独話すると、意を決してそいつの手を握った。毒を喰らわば皿までだ。こうなったらこいつに最後まで付いて行ってみよう。

引き上げられて立ち上がると、そいつは俺の目線の下に居た。薄暗い空には強い風が吹いている。

ふと振り返ると、そういえば大きな桜の木が成っていた。

出会い（後書き）

読みにくい話が書きたった。
続けたいけど、続けられるか分からない。

桜の木

深夜、何とも言えない寝苦しさに襲われ、死神は寢床から起き上がった。

少し住み慣れた小屋を出て少し歩くと、すぐにあの大きな桜の木に出会った。もう季節が季節なので花は咲かせていないが、傍から見ても寿命だということは分かりきっている事だった。あの変わり者と出会ったときはあんなにも燦燦と咲き誇っていたのに、今は裸の枝を見せている。もう枯れてしまっただろう。そしたらあいつは悲しむだろうと眉を曇らせた。あの変わり者は不思議な位桜の木に執着していた。それはもう、誰が見ても異常な愛情だと分かるほどに。

すると、その木の傍に人が立っていた。あの変わり者だ。桜の木がもうもたないと分かって最後に身に來たのだろう。相手はこちらに気付いていない。邪魔をしないようにと死神は踵を返して戻ろうとすると、そいつはその木に手を置いていた。

すると、突然辺りは明るくなった。桜の木はみるみるうちに花を咲かせ、あっという間に満開になった。そこには、先ほどの枯れそうな桜の木は無かった。まるで見てはいけない罪の現場を目撃してしまった感情に襲われ、死神は慌てて後ずさろうとする。すると、変わり者はこちらを振り返って、一言こう言った。

「見たなあ」

その瞳は少し悪戯っぽく輝いていたが、その奥は深い悲しみが埋まっていた。その目を見た瞬間、死神は逃げてはいけないことを悟った。このまま、その変わり者を一人にはしてはいけないと。

「私はな、常世から來たまれびととしてやって來た神なんだ」
重い沈黙を破るように、変わり者は口を開いた。隣に居る死神は、黙ってその言葉を聴いていた。

「たまたまこの国に寄ったとき、まだ若いその桜の木が目にとまって、一目見て、恋に落ちた」

太い幹に手を這わせ、慈しむように撫で上げる。うつとりと木を見上げていた。

「だから、こんなことをした？」

死に神が訊ねると、変わり者は視線を変えずに答えた。

「ああ。愛していたから、死なせたくなかった。ずっと手元に置いておきたかった。私は富みと命を与える神である私にとって、それは容易い事だった。だが、それは決して犯してはならない罪だった。私は命を奪われ、常世から追い出された。魂は私の体から離れることはない。生きることも死ぬことも出来ぬまま、私は永遠に存在し続けなければならないのだ」

死神は黙ってその言葉を聴いていた。言葉を探るように、視線を下に向けた。

風が吹くと、桜の花びらが舞っていった。冬の月が、木を照らしている。今の季節には似つかわしくない風景が、そこには存在していた。

「でも、それは許されないことだ」

重たい口を開けて、死神が言った。弾かれるように、変わり者は視線を死神へと移した。

「命尽きても生かされることは苦しいとお前は言ったじゃないか。

間違いなく生命の均衡は崩されている。町で死者が大量にでるのは、そのせいだ」

「わかってる。でも、力を持つものは、どうしても欲を叶えなくなる。代償は大きいが、それでも欲のほうが勝る」

「お前は長年生きてきて、その苦しみが分かるんじゃないのか」

すると、変わり者は目線を泳がせた。動揺した様子で目線を落とし、表情を隠して呟く。

「苦しいさ」

「なら何故」

死神が言い終わらないうちに、変わり者は捲くし立てるように言った。

「神である私たちにとって、この世の命は短すぎる。残される者の苦しさは分かるだろう。この気持ちを持ったまま、あと何千年も生き続けるのが耐えられないんだ。どんな罪を犯してまでも、私は共に居てくれる存在が欲しかったんだ。私の愛した桜の木と、共に在りたかったんだ」

言い終わると、変わり者は崩れ落ちるようにしてしゃがみ込んだ。強い口調であったが、言葉にはその弱さが滲み出ていた。

それでも、死神は自分の使命が分かっていた。ゆっくりと桜の木に歩み寄る。あと少しでその幹に触れるというところで、振り替えて変わり者に尋ねた。

「いいのか」

数秒の間が空いて、弱々しい声が返ってくる。

「もう、いい」

その言葉を聴いて、死神は桜の木にそっと触れた。

忽ち、桜の木はその輝きを失った。大量の花が零れ落ち、地面を桜色に染めていた。枝や幹は徐々に朽ちていく。そして、初めてそこには桜の木が存在した。命も魂も絶たれた桜の木が、屍となってそこに在った。

小さな嗚咽が聞こえた。ふと振り返ると、変わり者が泣いていた。「桜の木なんて、どこにでもあるじゃないか」

なんとなく言った言葉に、変わり者は直ぐに返した。

「この桜の木じゃなければ、駄目なんだ」

弱々しい口調だったが、言葉は強い思いが込められていた。

所詮神でも生き物なのだ。感情も欲も持っている。しかし、何かをそこまで愛したことの無い死神にとっては、それは理解の出来ないものだ。一人明後日の方向を見ながら、思いを馳せる。

この世の物に恋をするだなんて、曲がりなりにも神である彼らには、到底許されるものではなかった。

桜の木（後書き）

桜の木に恋しちゃった神様を書きたかっただけ。
でも、うまく書けない。
小説って難しい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7202x/>

曲がりなりにも神である

2011年10月24日23時59分発行